

# 本を選ぶ

## 高校図書館版

NO.70 2020年(令和2年)11月20日  
<https://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス  
〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

### 日本最南端の図書館で

久原 道代

石垣市立図書館がある石垣島は、東京から南へ1,952Km、台湾まで277Km、の位置にあり、昨年は15万人近くの観光客が、国内外から特色ある自然と文化を求めて訪れました。蔵書数約28万冊、一日平均200名余が来館する石垣市立図書館は、今年開館30周年を迎えた公立図書館です。

石垣島も新型コロナウイルスの影響を受け、図書館は4月から7月まで、休館と制限付き開館を余儀なくされました。休館中に「何とか本を貸してもらえないか」「どうしても子どものために本を借りたい」という声が続々と寄せられ、図書館を必要としている方々が確かにいるのだなあと、実感した期間でもありました。

図書館の入口から入ってすぐ横に、ガラス張りの「青少年ラウンジ」があります。中・高生なら、くつろいでおしゃべりをしてOK。普段は相談しながら宿題をしたり、グループで試験勉強などをしている生徒たちがいますが、現在は新型コロナウイルス感染予防のため、椅子と机を一時的に撤去しているので、残念ながら若い人たちの姿を見ることはできません。

新型コロナ禍前から、中高生の市立図書館の利用は減ってきていたので、中高生向けの企画を開催するなどしましたが、利用増に結び付けること

はできませんでした。高校の図書館司書さんの話では、「学校図書館にティーンエイジャー向けの本も、授業のための図書も充実してきているので用は足りているのでしょうか、それに部活や塾で皆忙しいから、市立図書館に行く時間がないのでは」ということです。

私が中高生だった40年程前にはなかったYA本は、現在、国内外の作家による個性的で魅力的な作品が溢れるほど出版され、自分が10代の頃にこんなYA本があったなら、今とは違う価値観・世界観を持った、もっと頭の柔らかい大人になっていたかもしれないと思うほどです。生徒のみなさんが、学校図書館司書さんを介して学校図書館でこのような本たちと出会っているのであれば、せめて勉強目的で市立図書館に足を運んでくれるだけでもよしとするべきだろうか。でも、市立図書館には、YA本はもちろん、赤ちゃんを対象にした絵本から、一般向けの本や雑誌、CDなど豊富な資料の蓄積があります。学校図書館にはない醍醐味を味わって知的な刺激を受けてもらいたい。そして高校を卒業した後にも「ちょっと図書館に行ってみよう」と、気軽に思う大人になってほしい。

毎春、島にある三つの高校を卒業した500人余りの若者が、進学と就職のために沖縄本島や本土へ海を越えて旅立って行きます。これから出会う様々な困難や挑戦に立ち向かうとき、新しい地の図書館で、または帰郷した時に故郷の図書館で、厳しい時代を生き抜くための知恵と元気を、ぜひ得てほしいと願っています。

(ひさはら みちよ：石垣市立図書館)

# コロナ禍における学校図書館について考える

—異動から半年、なんとかやっています—

熊木 寛子

## コロナ禍の中で異動となる

安倍前首相の一声で前代未聞の感染症対策による休校が決まり、3月初旬の休校前登校日。図書館に来た生徒の一人が「これで司書さんとはさよならになるかもしれない、元気でね」と言う。差し出された手を軽く握りながら「大丈夫よ」と返してはみたが、彼女の予言どおり、3月末に人事異動の内示が出てしまい、生徒たちにさよならを告げることもできずに、私は異動となった。8年間で多くの生徒と関わり、愛着ある職場に未練はあったが、仕方ない。声をかけてくれた彼女たちは皆、自分らしく元気にやっているだろう。

4月1日に現勤務校に赴任してから半年が経つ。着任式と始業式、入学式だけは無事行われたので、新任者が紹介されない事態が回避されただけでもありがたかった、と今となっては思う。その後再度の休校が決まり、5月中旬に分散登校が始まり、6月から徐々に普通授業となるまで、新しい職場に慣れることで精一杯の毎日だった。そしてそれは、現在も続いている。

## オリエンテーションの動画を作る

私が現在勤務する新潟県立長岡高等学校は、学級数24（普通科18、理数科6）、生徒900名ほどが在学する、創立149年を迎えた伝統と歴史ある地域の進学校だ。国公立大学への進学希望者がほとんどで、図書館の80席ある座席は朝、昼、放課後と学習利用の生徒で埋まってしまう。

長引く休校に際して体育祭などの学校行事も軒並み中止、授業時間も限られた中、新1年生に行う図書館オリエンテーションの時間は取れない。困った顔でそれを伝えに来た教務の先生の「動画配信という手もありますが」の一言に、「それなら、できるかもしれません」とつい答えてしまう。過去に視聴覚係として学校紹介動画を制作した経験が、こんなところで生きるとは。

ゴールデンウィークを前にした頃、無人の図書

館で一人スマホのカメラと動画編集アプリを使い、自分さえよく分かっていない図書館の紹介動画を作る羽目となり、（関係者限定ではあるが）授業動画を公開する先生方に混じって、とうとうYouTuberデビューを果たしてしまった。1年生には動画を見るように、学年だよりやホームページなどで連絡して頂くも、どれだけ生徒が見てくれたのか、正直、その再生回数は最後まで怖くて見るができなかった。

休校明け後の1年生は、それなりに本を借りに来る生徒、リクエストをする生徒もおり、これで良かったのだと思う。ただ、図書館だよりの配布回数を例年より多めにすること、冒頭に必ず利用案内を入れることは意識的に行っている。

## 課題研究とレファレンス

6月から学校はようやく動き出した。少しずつ薄皮をはぐように諸活動が出来るようになり、現在は新しい生活様式の中ではあるが、日常が戻ってきた感じだ。

勤務校では、2年生が普通科、理数科それぞれ、グループごとに課題研究に取り組んでいる。理数科の課題研究では、ポスターを作り、文部科学省事業のスーパーサイエンスハイスクール事業で他校に発表する機会があるとのこと。

担当教員から「課題研究の時間は生徒が図書館に来るかもしれませんが。ただ、PC教室も開放するので、図書館に来る生徒は少ないかもしれませんが」と年度初めに言われた。

前任者から一年間の予定や、資料提供をどのように行っていたのか、丁寧な引継は受けていたが、教員の「図書館に来る生徒は少ないかも」という一言で、課題研究についてはそれほど気に留めることなく過ごしていた。

そんなある日、授業中に突然、理数科2年生の生徒がやってくる。それも結構な数である。どうしようと思う暇もなく、気がついたら資料を探す

生徒に対応した感じだ。

早速取り組んだのは、AEDについて調べたいという生徒のレファレンスである。必要な文献を探すも、AEDが普及した年いくつか出ている程度で種類も少なく、古い。あとは救急医療に関する本の一部分に少し触れている程度。とりあえず、勤務先近くの公共図書館の資料を借用、生徒たちに使ってもらおう。

調べる中で、ある医学系の雑誌記事が目についた。ただし県内での資料の所蔵は、大学図書館1館のみ。通常は地域開放を積極的に実施する大学図書館も、感染症対策で学外者が来館して利用することは出来ないと言われる。必要部分を複写、郵送での提供となると、それなりの費用も発生する。大学図書館員の方からは丁寧な説明をいただいたが、更に調べる中で、地域の病院図書室に雑誌所蔵があることをWebサイトで確認。ご家族や、知人で病院関係者がいらっしゃったら、お願いして入手するといひ、と生徒にアドバイス。図書館での解決とはならなかった。

その後、CiNii Articles（日本の論文をさがす）サイトからアクセスできた関連の論文資料を生徒に手渡したところで、このレファレンスは一段落。生徒たちはどのようにこの研究をまとめるのだろうか、興味深い。

ネット検索の中で、「PUSHプロジェクト」というAED普及の取り組みが行われていることを知る。保健室でその掲示を目にし、養護教諭の先生に聞いたところ、昨年度、本校では新潟PUSHプロジェクトによるAEDの講習会を1年生向けに実施したのだという。なぜ生徒たちがAEDに目をつけたのか、そこでようやくつながった。

このレファレンスを通じて、少しずつ生徒や学校のことが分かってきた気がする。

### レファレンスとはコミュニケーションである

あるとき、検索機の前で一人悩む様子の生徒がいたので、思い切って声をかけてみる。話を聞き始めると、調べたいことが曖昧な様子。どのような資料があればいいのかを生徒とじっくり話しながら、一緒に考えた。話を聞いた後、私自身も雲

の上の何かをつかむような感じで資料を探す。ようやく提供に至ったところで「図書館で話をしているうちに、自分の考えが曖昧だということに気づき、それをグループの仲間に正直に話したところ、方針を変更することになりました」と謝られる。用意した資料にはちょっと自信があったので、残念な事例となった。こちら側が話を聞く、一緒に資料を探す姿勢を持つことで、生徒自身が考えをまとめるきっかけが出来たことはよしとしよう。

このように形にならないレファレンスは数多いが、これらの経験は次に活かせると思う。

2学期に入った現在、レファレンスをこなしていくうちに、図書館で司書の手助けを得ることが少しずつだが、生徒には浸透してきているようだ。こちらも、課題研究の時間前には、前回資料を探していた生徒たちの様子を見ながら、どのような資料が必要になるのか予測して揃える、関連リストを用意する対応が少しずつできるようにはなってきた。

図書館に常時席を置く係教員が私の様子を見ていて、時折助言をしてくださる。その中で、課題研究はこちらから言い過ぎない、しかし適切なアドバイスは必要、生徒の話を聞く姿勢が大切ですよね、という話になった。理数科は従前から課題研究をしている積み重ねがあるので、資料の調べ方や本を使うことも手慣れた感じに見えるが、普通科での課題研究実施は2年目。担当教員の多くは未だ手探りでの模索が続いている気がする。前任校も同様に、昨年度から始めた探究学習での課題研究は迷いながらの取り組みだったことを見てきた。そして、全国で探究学習に取り組む高校の多くも同様ではないだろうか。

「調べものはネットがあれば」と生徒も、そして教える先生方も考える風潮の中、図書館が役立てることを先生方に伝える必要性を感じながらも、新任の学校では周囲の様子もつかめず、どうすればいいのか途方に暮れることも多く、難しい。

少しずつ地道に取り組んでいくしかないようだ。

（くまき ひろこ：新潟県立長岡高等学校 司書）

# 本で知る 同時代の台湾

——リアルな台湾の“いま”を伝える本が続々翻訳

三浦 裕子

台湾の作家が書いた本を読んだことがありますか？

タピオカがブームになったり、修学旅行先として採用する高校も増えたりと、この数年、日本の若い人々が「台湾」に触れる機会はかつてないほど多くなっているかもしれません。また、コロナウイルス流行に対する政府の迅速で的確な対応や、若き天才 IT 担当大臣オードリー・タン氏の存在などに驚いた人も多いでしょう。でも、「台湾の書籍」は、日本でいま人気の韓国の本ほどには注目されていないようです。

私たち太台本屋 tai-tai books は、同時代台湾の本当に面白い本を日本に広める活動をしています。ここでも台湾の本について、少しご紹介します。



台湾は、知られざる出版大国です。台湾の国家図書館の統計によると、2019年の新刊点数は3万6810点。同年日本の新刊点数は7万1,963点ですので、日本の約半分の点数です。でも、台湾の人口が日本の約6分の1であることを考えると、台湾の“人口一人当たりの新刊刊行点数”は、ざっくり計算して日本の約3倍という計算になります。

実は日本でも毎年10点ほどの台湾の本が、コンスタントに翻訳出版されています。ただ、少し前まで、日本で出版される台湾の作品の多くは、台湾文学の研究者などが選定、紹介する、比較的重い文学作品でした。もちろんそれらは台湾の重要な作家の作品ではあるのですが、テーマや内容は、日本の一般的な読者、特に若い読者には身近に感じづらいものだったと思います。

そんな状況を変えたのが、呉明益著、天野健太郎訳の『歩道橋の魔術師』(2015 / 白水社)です。

現代の台北に生きる人物たちが子どものころに暮らした、今は無き「中華商場」での日々を振り返る10篇の連作短編集です。まるで若い頃の村上春樹作品を思わせる、さっぱりとしながら不思議な味わいのある文章と、夢と現実を行き来するかのような一篇一篇の物語は、台湾に興味のない読者にも、同時代の小説として素直に楽しめる作品です。もし台湾の小説を何か読んでみたいと思ったときは、まずこの作品をおすすめします。



“読み進む快楽”が得られる作品です。

文学以外でも、一般の読者が気軽に楽しめる台湾のビジュアル系人文書の翻訳出版が増え始めました。例えば、『台湾花模様 美しくなつかしい伝統花布の世界』(陳宗萍 / 如月弥生訳 / 2018 / グラフィック社)は、台湾の客家(はっか。漢民族の一民族集団)の人たちが風呂敷などとして使っていた「花布」のパターン集です。また、台湾では築数十年の古い建物をリノベーションして活用する例が増えていますが、『台湾レトロ建築案内』(辛永勝・楊朝景 / 西谷格訳 / 2018 / エクスナレッジ)は、実際に見に行けるリノベ建築の例や、そのディテールの鑑賞ポイントなどを、多数のカラー写真で紹介した本です。

花布も、レトロ建築も、おしゃれなものとして、台湾の若い人に好まれています。IT活用など新しいものをどんどん試す一方、「伝統的なもの、古い

ものを今に活かす」という価値観も併存しているのが、今の台湾です。“本”から、今のリアルな台湾が見えてきます。

太台本屋 tai-tai books は、台湾の本の版權エージェントとして、この2年間で約20作品の日本版翻訳出版契約を結びました。それらの作品が年末から来年にかけて続々刊行されます。今の台湾の姿が反映され、そして日本の一般の若い読者が読んで面白いと思える作品ばかりを選んでいきます。うれしいことに、私たち経由以外でも、同時代の台湾の本の日本での出版が増えているようです。

そこで、台湾の本を読んでもみたいけど何から読んだらいいのかわからない、1冊読んで面白

かったのもう1冊読んでもみたい、という読者のために、日本を出している、またはこれから出る台湾の本を紹介する小冊子「TAIWAN BOOKS 台湾好書」を企画、制作しました。内容のPDFが、発行元である台北駐日経済文化代表処台湾文化センターのウェブサイト (<https://jp.taiwan.culture.tw>) からダウンロードできるようになる予定です。ぜひご覧ください。

(みうらゆうこ：太台本屋 tai-tai books)

